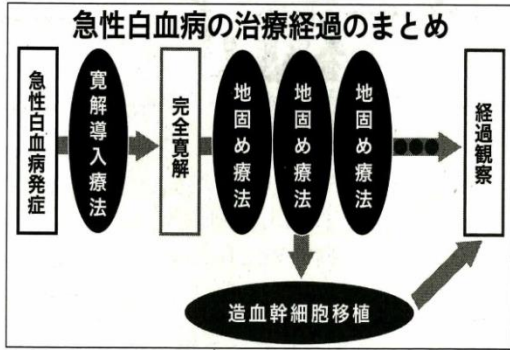


# 大人の発症率 圧倒的



「白血病」とは、骨髄の中の造血細胞が成熟する過程でがん化した「血液のがん」だ。「子どもがなりやすいイメージ」があるが、実は大人の発症率が圧倒的に高い。患者数も高齢化を受けて、増えている状況だ。

正常な造血幹細胞は、白血球、赤血球、血小板など、血液中の細胞に成長する。しかし、白血病になると、正常な造血幹細胞の居場所が無くなってしまふ。

その結果、①白血球が少なくなるため、細菌やウイルスに感染して「熱が

がんを防ごう

今年に入り、競泳女子の池江璃花子選手(18)や、シンガー・ソングライター岡村孝子さん(57)が、それぞれ「白血病」の治療に専念することを公表した。白血病とはどのような病気なのか。室蘭市内の行政機関や医療機関、患者団体、町内会連合会などによる「室蘭がんフォーラム」(会長・野尻秀一室蘭市医師会長)の構成機関の一つ・室蘭民報社では、製鉄記念室蘭病院長の吉田正宏・血液腫瘍内科医長(日本血液学会認定血液専門医)らの協力を得て、白血病の症状から診断の流れや、治療法などについてまとめた。

(松岡秀直)

## 白血病特集

# 大半が血液検査で診断

「白血病は、大きく分けると「骨髄性」と「リンパ性」があり、それぞれ「急性」と「慢性」に分けられる。特に急性白血病は日単位で一気に進行するため、すぐに抗がん剤治療による「寛解導入療法」を行う必要がある。

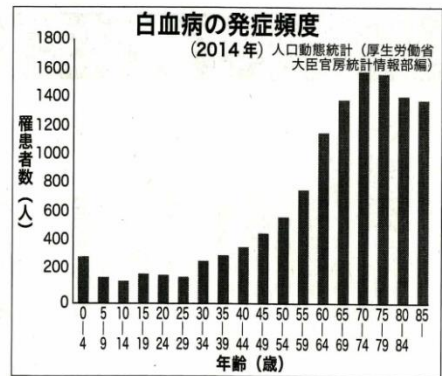
抗がん剤治療を行い白血病細胞が骨髄から検出されない状態の「完全寛解」となると、「地固め療法」と呼ばれる治療過程に進む。この地固め療法を繰り返して行うことによって、完治に至る例も少なくない。

しかし、白血病のタイプによっては、これらの抗がん剤治療のみでは高確率で再発してしまうものもあり、骨髄や末梢血幹細胞、臍帯血を用いた「造血幹細胞移植」も行つ場合がある。

西胆振医療圏で急性白血病の治療が行える施設は、製鉄記念室蘭病院のみだ。吉田医長は「最新の治療はもちろん、その方に合った最適な治療を提供したい」と話。

続く②酸素を運ぶ赤血球が減るため、「だるさや息切れなどの貧血」が現れる③血を止める細胞・血小板が少なくなるため、「けがをした時に血が止まらない」「ぶつけた記憶がないのに、あざができる」などの症状が出る。

1週間前から熱が出ている、動悸がある、歯茎から血が出る…などが続いている人が、詳しい血液検査や骨髄穿刺などの検査で、白血病と診断されるケースが大半だ。



白血病の治療などについて、吉田医長に解説してもらった。

◇ 日単位で症状が進み、生命への危険が伴う急性

白血病は、すぐに化学療法を行う必要がある。目標は体内の白血病細胞をゼロにすることだ。抗がん剤の有効性が非常に高いことから、完治も目指せる。

初めに行う「寛解導入療法」では、1週間かけて抗がん剤を投与する。白血病細胞の多くを殺すことができるが、正常な白血球も同時に減ってしまう。一時的に細菌など

の感染に無防備になるため、無菌室で生活する必要がある。この期間には、発熱や食欲不振、口内炎、脱毛などの副作用が現れる。

多くの場合、寛解導入療法によって、骨髄中に白血病細胞が見つからない状態「完全寛解」に至る。しかし、全身には目に見えないレベルで白血病細胞が残ってしまったため、「地固め療法」と呼ばれる抗がん剤治療をさらに繰り返し行い、白血病細胞が完全にゼロになる状態を目指す。

ただ、急性白血病の中にもさまざまな種類があ

り、いいタイプの白血病に「造血幹細胞移植」を

行う場合がある。みて完治が目指せるが、造血幹細胞移植では、高い確率で再発する悪いタイプも存在する。その脱毛などの副作用が現れる。

## 「急性」すぐに化学療法

製鉄記念室蘭病院・吉田正宏医長



白血病の治療法などについて解説する吉田医長

造血幹細胞を死滅させ、その後、ドナーからもらった造血幹細胞を移植する。

造血幹細胞を点滴で血管内に注入すると、空になった患者の骨髄に自ら移動し、生着する。造血幹細胞が成長して正常の血液細胞が増えてくると、抗がん剤や放射線をかいくぐって残った白血病細胞を免疫作用で攻撃するため、白血病の根絶が期待できる。

ただ、この免疫効果には「移植片対宿主病」という裏の部分もある。白血病細胞だけでなく、肝臓や腸なども攻撃し、臓

器障害を引き起すもので、命に関わる場合もある。このように、造血幹細胞移植は効果が高い治療である一方、非常に危険性が高い治療なので、若くて元気な患者にしか行うことができない。

急性白血病の治療の経過をまとめると、まず、寛解導入療法によって、完全寛解を目指す。そして、地固め療法を繰り返し行う。これで不十分な場合には、造血幹細胞移植を行うことを考慮する。

(今年3月27日、第18回室蘭がんフォーラムの講話から)